

學界展望

カール・ラムプレヒトと經濟史研究

上原專祿

—

學問研究において、個々の研究者と學界の全體とは相互にどういふ地位を占め合ひ、どういふ關聯に立つものであるかといふ問題は、それが本來一の歴史事象であり、文化事象であるところから、一義的に答へえぬものであることは言ふまでもない。概略を言へば、個々の研究者は學界から課題と方法との一般を受けとりながらも、研究の實際に即して、課題そのもの、方法そのものをも個性化し、それによつて學界の現状を超越せんとする。學界の側では、個々の研究者に對して課題と方法との個性化をゆるしつつも、個性化せられた課題と方法とをも、個々の研究者の業績とともに、學界そのものの共同財産として享有し且つ消化しようとするのであり、それによつて個々の研究者を學

カール・ラムプレヒトと經濟史研究

界より逸脱せしめることなく常にそれらをその内に包攝するところの、一の全體として成長せんとする。

しかしながら、個々の研究者と學界全體との關聯をかやうに見るのは、兩者の關聯を極めて圖式的に眺めたものに過ぎず、その樂觀的な統一的畫象は、現實の種々相の前には、忽ちにして破れ去らざるをえない。學問研究がいかに動機づけられてゐるか。學問研究のうちにいかなる實踐的意義を認めんとするか。研究對象をいかなる幅員と興行とで取扱はんとするか。研究方法が具體的にいかに定められるか。一定の研究業績がいかなる學術的及び超學術的意義を取得するか。かやうの問題は、個々研究者にとつても學界にとつても抽象的一義的に答へうる性質のものではなく、それぞれこれらの契機を内に含みつつ相互に交渉する個々研究者と學界との關聯も一律には定めがたい。本稿においては、多様なべき兩者の關聯を念頭に置きつつ、巨匠カール・ラムプレヒトによつて、いかなる課題を有つものとして、又いかなる視野と視角との下に、經濟史研究が行はれたであらうかを觀察し、この方面の業績と方法とに關してラムプレヒトと現代の學界とがいかに關聯して居り、又いかに關聯を失つてゐるかを、併せ考へたいと思ふ。

二

事の順序として先づ、故カール・ラムプレヒト教授 (Karl Lamprecht, 1856-1915) の經濟史に關する研究業績を通觀し、研究の對象と視野とがいかにやうに推移して行つたかを概觀してみよう。すると、最初に擧げらるべきものは、一八七八年ライプツヒ大學に提出せられた學位請求論文、*Beiträge zur Geschichte des französischen Wirtschaftslebens im elften Jahrhundert.* であらう。十世紀における社會的紛糾と經濟的混亂との後を受けて、事物の新しい事

態が徐々にしかも彌々力強く始まつて行く時代のこととして、十一世紀におけるフランスの經濟生活を、就中ロー
ル以北のそれを取扱つてゐるこの論文には、少くとも二種の刊本が存するものであつて、一は G. Schmoller : *Staats-
und socialwissenschaftliche Forschungen*. Bd. I. Heft 3. 152 S. として刊行せられてゐる廣本であり、他はこのう
ちの第一章のみに履歷書を添へて刊行せられた略本である。今、廣本の序文における明言と、略本所收の履歷書とに
よつて考へると、此の論文こそは、ラムプレヒトの研究諸業績中、最初に公刊せられたものと見うべく、ラムプレ
ヒトは先づ經濟史研究者としてドイツの、やがては世界の、學界に知られるにいたつたと言つてよす。

この論文の公刊後もラムプレヒトは引き続き經濟史研究に努力を集中して居り、最初はケルンのフリードリッヒ・
ヴィルヘルム・ギムナージウムにおいて、一八八〇年以降はボン大學の私講師として教職に従事しながら、一方にお
いては南部及び西部ドイツの各地に、就中モーゼル及び中部ラインの諸地に倦まざる史料探訪の活動を行ふと同時に、
他方にもつては幾多の優れた經濟史研究を公表してゐる。即ち一八八五年迄に公表せられた主要文獻を顧みると、

Frankische Wanderungen und Ansiedelungen vornehmlich im Rheinland (*Zeitschrift des Aachener Geschichts-
vereins*, 4, 1882 ; *Westdeutsche Zeitschrift*, 1, 1882) ; Schatzung des Klosters S. Peter in Kreuznach (*Westdeu-
tsche Zeitschrift*, 1, 1882) ; Köln im Mittelalter, I. (Prenussische Jahrbücher, 49, 1882) ; Zwei Notizen zur ältesten
deutschen Geschichte (*Zeitschrift des Belgischen Geschichtsvereins*, 16) ; Die ältesten Nachrichten über das Hof- u.
Dorfsystem, speziell am Niederrhein (*ibid.*) ; Wirtschaft u. Recht der Franken zur Zeit der Volksrechte (*Histori-
sches Taschenbuch v. Raumer-Maurenbrecher*, VI, 2, 1883) ; Deutsches Städtelieben am Schluss des Mittelalters

(Sammlung v. Vorträgen, XII, 3, 1884) が注目せられる。すでにこれらの論題が示してゐる通り、經濟史研究の對象は一八七八年の學位請求論文の對象となつたフランスからドイツに移り、嘗つて十一世紀に局限せられてゐた時代的擴がり、古代からフランク時代を経て中世の末期にまで擴大せられてゐる。この頃ラムプレヒトが經濟史研究にいかにも多大の關心を有して居り、又ドイツにおける斯學の發展にいかにも熱意を有してゐたかを示すものに、上掲の諸論稿の他、R. Hoeniger との協同勞作に成る一八八二年度から一八八四年度に及ぶところの、そして逐次コンラッドの『國民經濟學及び統計學年報』に發表せられたところの、ドイツ經濟史學界の諸業績と動向とに關する周到なる學界展望が存する (Die wirtschaftsgeschichtliche Studien in Deutschland im Jahre 1882, I ff. : Courads Jahrbücher f. Nationalökonomie u. Statistik, Neue Folge, 6. Bd. ff., 1883 ff.)。まだ年少キラムプレヒトが、Kölnher Schreibensurkunden des 12. Jahrhunderts, 1884 f. の編著者とともに行つたこの學界展望は、尤に當時のドイツ經濟史學界を呑むの概があり、相繼いで公表せられる諸研究とともに、ラムプレヒトは經濟史家として學界に強く印象づけられつゝあつたと見られる。しかも彼をして單にドイツ學界においてのみならず、全世界のそれにおいて斷然重きをなさしめ、經濟史家たるの印象を抜くべからざるものたらしめたものは、七〇年代の末葉以來の史料採訪により自ら蒐集した諸史料に基き、一八八五年、八六年の兩年に涉つて公刊せられた一大研究『中世における獨逸經濟生活』(Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter. Untersuchungen über die Entwicklung der materiellen Kultur des platten Landes auf Grund der Quellen zunächst des Mosellandes. I. 1. u. 2. : Darstellung, 1886 ; II. : Statistisches Material. Quellenkunde, 1885 ; III. : Quellen-sammlung, 1885) であることは、異議の無きところであらう。若き

ムプレヒトの漲ぐる熱情は、異常の知的透徹力と無比の意志的實踐力とに結びついて、經濟史研究の形をとつて、ここに大河の一時に決する如き表出を見出したわけである。それと同時に注目せられるのは、この研究が、主としてモーゼル及び中部ライン地方の諸史料にのみ基くものでありながら、シュタッフエン時代以來の植民地域を除いた古ドイツの全土についての一般畫象を與へうとの確信の下に、遂行せられてゐることである(第一卷、序文参照)。モーゼル及び中部ラインの特殊相のうちに直ちにドイツ發展の全體相を觀察せんとし、又觀察しうとなすのが本書の結構なのであつて、著者の眼界はドイツの全土に展がつてゐる、少くとも展がつてゐると信じてゐる。時代について言へば、第一卷の敘述はフランクの部族法時代から始まつて居り、その部分(一六〇頁)は、從來彼が諸誌に發表した諸研究の總括とも見うるのであるが、ここでは結論(一四八四頁以下)におけると同様に、實は部族法時代を越えてカイサル及びタキトゥスの古代にまで遡つての觀察が行はれて居るのであり、以下記述は中世の終にまで及んでゐる。この廣大な空間的並に時間的擴がりに併せて、對象取扱の幅が注意せらるべきである。經濟史研究、法律史研究、社會及び政治史研究の何れかが特に重視せらるべきではなく、總體としての物的文化(die materielle Kultur in ihrer Gesamtheit)なるものが歴史研究の目標とならねばならないといふのが、本書における基本觀照である(第一卷、序文参照)。この最後の點については、後段更に立ち戻つて考へることとする。

81
かくの如き空間的並に時間的擴がりと、かくの如き方法的根本觀照の下に遂行せられた大規模な研究の後では、しかもそれが周到緻密なる史料研鑽に基いて行はれたと信ぜられてゐる場合には、中世ドイツの經濟生活に關する限り、ラムプレヒトは更に何を究むべきであつたであらうか。モーゼル及び中部ライン地域以外に史料をもとめて、先著の

所説を或は確證し或は補修するの舉に出でんとしたであらうか。或は研究對象を、空間的又は時間的に、變更し又は擴大せんと努めたであらうか。或は又、對象取扱の方法につき轉換を試みようとしたであらうか。事實においては、彼はこれらの何れの途をも選ばなかつたと言つてよい、少くとも差當つてはさうである。そして一八九〇年迄は研究のあらゆる點で先著の舊軌道をいはは隋性的に歩み續けてゐるやうに見える。即ち大著刊行後この年までに發表せられた研究は、筆者の知れる限りでは、大部分社會經濟史に關するものであり、Die Entwicklung des deutschen, vornehmlich des rheinischen Bauernstandes während des Mittelalters u. seine Lage im 15. Jht (Ein am 15. D z. 1886 auf der Generalversammlung der Gesellschaft für Rheinische Geschichtskunde zu Köln gehaltenen Vortrag; Westdeutsche Zeitschrift, VI, 18 ff., 1887); Zur Sozialstatistik der deutschen Stadt im M.A. (Archiv f. Soz. Gesetzgebung u. Stat. I, 485 ff., 1888); Zur Sozialgeschichte der deutschen Urzeit (Festschrift f. G. Haussen zum 31. Mai 1889); Ländliche Dasein im 14. u. 15. Jht. vornehmlich nach rheinischen Quellen (Westdeutsche Zeitschrift, VIII, 189 ff., 1889); Grosshandel u. Bürgerthum zur Refo. m. n. tionszeit (Z. f. Handel u. Gewerbe, Jahrg. 3. Nr. 3—4, 1890) 等がそれである。尙ほロンラッド『國家學辭典』初版(一八九一年)に寄稿せられた Baurer; Baurerigt u. Bauernstandの二項はこの期の終に成つたものとして、ここに擧げてよからうし、論文集 Skizzen zur rheinische Geschichte が一八七七年に公刊せられたことも附記し置くべきであらう。何れも有益なる論稿であるには相違ないが、その取扱つてゐる時代の點でも、ライン地方を中心としてゐる點でも、その對象の點でも、先の大著の範疇を多く出づるものではなく、そして先著を支へてゐる精神緊張は見られない。言はば光輝燦たりし太陽の薄れ

行く餘光がここに認められるに過ぎないのであつて、一種低徊の感じをさへ與へるものなしとは言ひがたいのである。

そのときに方つてラムプレヒトは、一八九〇年七月ライン歴史學協會からライン諸賃子帳編纂の委囑を受け、八月には目錄作製の目的を以つてする下部ライン諸文書館の歴訪を了し、すでにその秋には目錄部の刊行を見るに至つた (Verzeichniss niederheinischen Urkunden, eine Vorarbeit zur Herausgabe d. rheinischen Urbare, Marburg, 1890, 54 ff. Gülte文庫 F. 100)。この編纂事業は、彼の研究生生活に一新生面を開くべきものであつたかに思へる。蓋し、先の大著はモーゼル及び中部ライン地域の史料に基くものであり、今や下部ラインの史料を研鑽することによつて、先著を補修するの可能性が與へられたからである。事實彼は目錄の刊行に際して之れに賃子帳に關する史料學的考證、賃子帳記載の發達史を附し、先著第二卷における該當部分の増補修正版たらしめようとの計劃を樹てた (目錄、二頁參照)。この計劃は實現せられなかつたけれども、彼はここに昔日の研究力を先著補修の方向において再び發揮するかの態勢をとるに至つたわけである。

しかもその後の實際経過においては、それは單なる態勢たるに止まつたのであり、下部ライン賃子帳目錄に示唆せられてゐる研究方向をば現實には多く歩まなかつたと見られる。即ちマールブルヒ大學教授たること僅かに一年にして、ラムプレヒトは一八九一年ライプツヒ大學教授となり、終生この職に止まることになつたが、ライン流域を去つたこの一八九一年こそは、同時に彼の『獨逸史』(Dortzule (Gefährliche)) 第一卷初版刊行の年であり、爾來一九〇九年までは、十二卷十六冊、増補二卷三冊に上るところの、この『獨逸史』の大敘述と、一八九三年以來はこの『獨

逸史』を中心としての方法論争及び方法論的著述とに、全努力が集中せられることとなる。されば業績を介して考へられる限り、一八九一年は、ラムプレヒトにとり、研究領野の思ひ切つた擴張、空間的並に時間的視野の異常なる擴大、それと同時に研究方法における一大轉換の年であつた。一八八五年及び八六年の『中世における獨逸經濟生活』においてすでに、總體としての物的文化なる基本觀照に従つて、綜合的に觀察せられた經濟、法律、社會及び政治の生活諸領域に對して、今やいはゆる精神文化の全領域が加へられるにいたつた。先の大著においてもすでに中世の終まで取扱はれてゐたのに、今や最近世並に現代をも含めたドイツ民族生活の時代的全發展が考察に上るべきことになつた。研究領野の擴張と、空間的並に時間的視野の擴大とは、叙述對象の機械的羅列を欲しない限り、視角の統一なくしては不可能であらうといふ理由だけからしても、研究方法についての一大工風を必要とするわけであり、逆に言へば研究領野の擴張と視野の擴大とが、統一的視角を可能ならしめることにもなる。その新しい統一的視角こそ、『獨逸史』の全卷と方法論的論著とを通じて展開せられ今日では周知の、民族心の内面的發展の考であり、精神生成的發展段階としての文化時代の理念である。されば、一八八六年から九〇年迄の一見學問的に不毛の期間は、實は九一年以降の大著『獨逸史』のための摸索探求の時期であり、文化史家として大なる活動を行ふための雌伏呻吟の時期でもあつたのである。

然らば、一八九一年以後においては、從來の經濟史研究はラムプレヒト自身によつて、いかに取り扱はれたであらうか。文化史研究の側ら、從來の軌道と方法とによる經濟史研究も繼續せられたであらうか。これに對しては否定的に答へられねばなるまい。少くとも發表せられてゐる業績の示す限りでは、一八八五年及び八六年の『中世における

『獨逸經濟生活』に頂點を有つ形態での經濟史研究は、行はれては居らないのである。然らば、一八九一年以降は、彼は經濟生活の史的展開に關しては觀察の興味を失つたであらうか。斷じて然らず。彼は『獨逸史』の各所において社會經濟史的觀察と敘述とを行つてゐる他に、その補卷 *Zur jüngsten deutschen Vergangenheit* の第二卷第一冊(序文一九〇三年、發行一九〇四年)の全篇を擧げて經濟生活並に社會發展の觀察を行つてゐる。「晩年の出版にかかると *Deutsche Geschichte der jüngsten Vergangenheit und Gegenwart*, 2. Bd., 1912/13. の第一卷は、この『獨逸史補卷』第二卷第一冊からその最後の章を除いたものに字句の修正を施したものである。」更に巨匠晩期における珠玉の名品『歴史的思考入門』(*Einführung in das historische Denken*, 1912.) においても、經濟生活の發展を敘すること周到であるし(一〇四頁以下)、イナマ・シュテルネック『獨逸經濟史』第二卷やテオ・ソムメルラード『獨逸における教會の經濟活動』第一卷の上梓に際しては書評を行ふこと嚴であるし(前著に對しては *Jahrbücher f. Nationalökonomie u. Statistik*, Dritte Folge, IX, 1905, S. 294 ff. 後著に對しては *Zeitschrift f. Socialwissenschaft*, III, 1900, Heft 10, S. 705 ff. に書評が行はれてゐる)、又己れ自らの經濟史研究の方法を敘すること切なるものも存するのである(*Die Psychisierung der Wirtschaftsstufen*, *Zeitschrift f. Kulturgeschichte*, IX, 1902)。かくの如くにして、一八九一年以後といへども、經濟史研究の興味は依然として旺盛である。しかもそれらは悉く、新しき文化史研究の有機的一翼を形作るものであり、文化史的觀察の興味によつて支へられ、又生かされた經濟史考察である。經濟生活は、今や、從來とは異つた視角と方法との下に把握せられるにいたつた。その新しい方法如何の問題に答へるためには、先に一言した民族心の内面的發展及び文化時代の理念を吟味せねばならず、そのためには更に一八八五・六年の大著の方法に

立ち戻り、更には一八七八年の處女作にも遡らねばなるまい。

以上の必要ではあるが多少とも煩はしい文献案内的敘述を終るに先立つて、ラムプレヒト史學における經濟史研究の地位を考へるためには、もう一つ附記し置くべきことが残つてゐる。それは『獨逸史』第一卷の第三版(序文一九〇一年、發行一九〇二年)の序文にいたつて明言せられてゐる世界史的觀察への關心とその方法との問題である。世界史的關心は、カナダ及び北米合衆國への旅行と、『近代歴史學』(Moderne Geschichtswissenschaft, 1905)の講演と著述との行はれた一九〇四年以來、頓にたかまり、やがてはそれがラムプレヒトの研究生活の中心を占めるようになる。即ち彼は一方においては一八九一年以來の大著の完了を急ぐとともに、他方においては仔々として世界史的觀察と、就中世界史研究のための制度的施設の樹立とに努める。その際、理念的方法はすでに獲得せられてゐる。それはすでに主著第一卷第三版序文において明記せられてゐるところの、最初ドイツ民族の歴史生活について發見せられたとなく民族心の内面的發展と精神發展段階としての文化時代とは他の文化諸民族についても同様に發見せらるゝとの確信をば、今や經驗的に實證することを中心課題とするものであり、同學の人々によるこの方面の研究業績は一九〇七年以來、彼の主宰する『文化及び普遍史論考』(Beiträge zur Kultur- und Universalgeschichte)に續々として發表せられる。世界史研究のための制度的施設はすでに一九〇六年の『普遍的研究所のための圖書館基金』の設置によつて始められてゐるが、一九〇九年のライプツヒヒ大學におけるザクセン王立『文化・及び普遍史研究所』(Institut für Kultur- und Universalgeschichte)の開設によつて一應の整備を遂げる。この研究所開設の年こそは、同時にあたかも『獨逸史』完結の年であり、爾來ラムプレヒトは一切の施設と研究員——わが三浦新七博士と新見吉治博士とをも

含めて——とを動員して、全世界の歴史學的征服に邁進する。今や研究の空間的並に時間的視野は世界の全體と人類の全歴史とに擴大せられて、無限大となる。無限の世界をば有限の手段を以つて支配せんとするラムプレヒトは、今ぞ文化史研究者の外貌の下に、むしろ哲人たり詩人たるところの眞面目をば露呈する——

三

前節においては、經濟史研究から出發したラムプレヒトの研究領域がいかに擴張せられて行き、空間的並に時間的視野がいかに擴大せられて行つたかの經過を多少とも外面的に辿つて、ラムプレヒトにおけるいはば遠心的志向の強大なるに注意を拂つた。しかしながらラムプレヒトにあつては、他のあらゆる偉大なる研究者の場合におけると同様に、この停まるどころを知らぬ遠心的志向は、常に強烈なる求心的志向に結びついてゐるのであり、觀察に上り來る外界事象の空間的並に時間的擴がりが増大せられる程、それらを統一的に把握しうるための單一的なる視角が彌々熱心に求められることとなる。否、その單一的視角の獲得の故にこそ、空間的並に時間的視野を擴大することになるとも言ひうるのであつて、觀察對象の増大したために注意が散漫となるが如き場合と同日の談ではない。而して、彼にあつてその單一的視角が那邊に求められたか、又それがいかなる構造のものであつたかの問題は、學術的に表現すればラムプレヒト史學の方法如何の問題であらうが、實はラムプレヒトの精神姿態の特徴如何を直接に問ふ問題であり、ラムプレヒトにおける視角の推移を辿ることは、實は彼の精神成長の跡を尋ねることに他ならぬのである。かやうの觀點から本節では、ラムプレヒトにおける方法の諸問題を考へてみる。

この場合にも我々の注意は先づ、ラムプレヒトによつて最初公表せられた研究業績たる『十一世紀における佛蘭西經濟生活』(一八七八年)に向けられる。この研究は方法的に觀てすでに若干の注目すべき特徴を備へてゐる。即ちこの研究が、統計學をば永久に流れ行く歴史潮流の斷面圖として理解せんとするドイツ的觀照に基き、フランス經濟生活の歴史的推移を十一世紀なる時限を以つて横斷し、その斷面圖をば統計學的方法によつて畫き出さうとするものである點に、著者自身が強調し、且つ從來フランス人によつては嘗つて行はれたことの無い最初の試みとして自負してゐるところの、方法上の一特徴が存する(序文)。しかしながら方法的特徴はこの點に盡きるものではない。取扱はれてゐる時代の性質上、原始生産に關する一般的觀察から記述が始められてゐるが(四一三〇頁)、農業を技術學との關聯において記述することや、農業の歴史を敘することがこの研究の任務ではなく、『農業における國民の生活様式を記述することが課題である』とせられてゐる(三頁)。従つて作野制度を取扱つてゐる第二章においても(三〇一七〇頁)、『實物經濟と貨幣經濟』と題する最後の章においても(二〇六一一四三頁)、法律關係の側からも問題を考へること甚だ詳密であるが、就中、農業労働者を取扱つてゐる第三章においては、經濟並に法律兩基礎の上に農業労働者階級の敘述が行はれてゐる(七〇一—一〇六頁)。農業自體が研究の對象ではなく、そこに現れた國民の生活様式が記述の對象であるといふこの主張は、たとひこの國民の生活様式なる概念が未だ慣例的にしか把握せられて居らないとは云へ、直接には一八八五・六年の大著の方法に、やがては『獨逸史』のそれにも繋がる立場として、注意せられてよい。

この研究の後に、前節に掲げた數篇の豫備的論稿の發表と、倦むことなき史料蒐集と研鑽との數年があつて、やがて『中世における獨逸經濟生活』が公刊せられる(一八八五・六年)。成稿の次第はすでにこの大著の方法的立場を示唆

してゐる、即ち最初に、未刊並に稀覯文書の史料集たる第三卷が成り（一八八三年、基督降誕節の序文）、次いで各種の統計的資料と批判的史料案内とを含む第二卷が成り（一八八四年八月の序文）、この兩卷が一八八五年に公刊せられる。その後、敘述部分たる第一卷の一・二兩冊が成つて（一八八五年五月二十日）、これが一八八六年に刊行を見る。史料蒐集、次いで外的・並に内的史料批判、最後に敘述といふ、その當時までにドイツ史學の常道となつてゐた歴史記述の一般原則は完全に且つ痛ましい迄に忠實に遵守せられてゐる。ひとは自らこの書を手にして實證的客觀的精神の熾烈なるに嘆賞の念を禁じ得ぬものがあらう。しかしながら、史料蒐集、史料選擇、内外批判、敘述を行ふ場合、すでに技術を越えた統一的視角が必要であるとは言ふまでもない。そしてラムプレヒトの場合、その統一的視角は、極めて意識的に定められた『總體としての物的文化』の理念であることは、前に述べた通りである。即ち第一卷々頭のグスターフ・フォン・メフィスセンに宛てた獻辭に彼は言ふ、『以前からあつた法律並に法制史研鑽と並んで經濟史研究の活した目覺めがあつた後では、一面的にならぬといふことが、即ち經濟問題でも、法律問題でも、乃至は社會及び政治問題でも、特に前面に押し出ることがないといふことが、肝要であらう。即ちむしろ今や總體としての物的文化をば歴史研究——この研究が、信仰、學問、及び藝術といふ理念的なる發展諸要素の探求に對立して、總じて物的なる事物に特に向つてゐる限りでは——の目標として把握すべし、といふ課題が提起せらるべきであらう』と。研究題目の點からすれば、『中世における獨逸經濟生活』が先の『十一世紀における佛蘭西經濟生活』の相似形的擴張であるのとは逆に、方法的に觀れば、先著において多少とも機械的偶然的に並べられてゐた經濟的觀點と法律的觀點との二元論的立場は、今やそれに社會的及び政治的關係をも加へた上で更に『總體としての物的文化』なる統一的理念に

よつて超克せられ、視角としては顯著なる相似形的收斂が行はれたことになる。この統一的理念の獲得、視角の收斂がいかに大きい方法的意義をドイツ學問史の上で有してゐるであらうかを、ひととはたとへばフォン・マッラーの大法制史研究（一八五四—六六年）や、フォン・イナマ・シュテルネググの經濟史研究（一八七九年以降）の有つ一面的傾向と對照することによつて會得しうるであらう。

しかも我々はこの視角の收斂に注意を向けると同時に、次の諸點をも見失ふべきではない。即ちここに提起せられてゐる『總體としての物的文化』理念の統一性は、經濟と法律と社會及び政治との三又は四生活領域事象の不可離的有機的聯關が現象としての諸事象間に看取せられる、といふだけの意味のものであつて、この三者又は四者が必然的に相聯關する内面的統一性を有つてゐると考へられてゐるのではない。そして、その意味では尙ほも偶然的なる事象的聯關の世界が、ラムプレヒトに對して客觀的に對立してゐるのであつて、その現象的客體をば史料研鑽といふ手段を用ひて外側から觀察し、且つ記述するといふのがこの大著的方法的特徴であり、その意味において又この書における方法は客觀的と言ひうると思ふ。更に注意すべきことには、『總體としての物的文化』の世界は、獻辭の示す通り、『理念的なる發展諸要素』の世界、換言すればいはゆる精神文化の世界とは一應離れて、客觀的に相對立するものと考へられてゐるのであり、その意味において又この書は客觀的觀照の上に立つてゐると評しうるであらう。要するに『中世における獨逸經濟生活』は、飽くまで實證的であつて恣意性の排除に努めてゐるといふ意味において客觀的であり、物的文化の世界が精神文化のそれに對置して考へられてゐるといふ意味において客觀的であり、その物的文化の世界が研究者の外側に存在してゐるものとして取扱はれてゐるといふ意味においても客觀的である。視角は先著に

比して著しく收斂せられてゐるけれども、完全なる視角統一の域には程遠いと言はねばなるまい。一にはゆる物的文化の世界の内面的統一性を樹立し、二に物的文化と精神文化との兩世界を一元化し、三に一元化せられた世界と研究者自己との内面的統一性を確保するところまで進まない、視角は泛動し、その統一は徹底を缺くわけのものであらう。然らばいかにしてその統一を成就すべきであらうか。これこそ、『獨逸史』において答へらるべき、そして意識してそこでその解決に努力せられた方法的難問であり、又かかる難問の前に一身を意識的に投じた點にすでにラムプレヒトの求心的志向の強烈なるを見出しうるし、又かかる構造の問題を意識した點に彼の精神姿態の一特徴を發見しうると、私考するのである。

かかる方法的課題を内に藏してゐる『獨逸史』においては、ドイツ民族生活の全領域が、即ちいはゆる物的文化の世界と精神文化のそれとが共に觀察に上り來り、時代的にはその古代から最近世にいたる全時代が敘述對象と成るに至つた。一八九一年に第一巻初版が公刊せられ、一九〇九年に至つて漸く最後の巻が出版せられたのであつて、その間約二十年の歲月が流れてゐる。従つて細かく觀てゆくとその間先きの方法的課題の解き方にも推移のあることが看取せられるのであり、後述の如く、特に經濟生活の扱ひ方については段々と工風が凝らされてゐるのを發見する。しかし、この主著において彼が最後に到達し、方法的著述において、就中『近代歴史學』(一九〇五年)や『歴史的思想入門』(一九二二年)において要説せられてゐる形で、視角統一の問題を考へてみると、次のやうな諸特徴が我々の注意を牽く。

第一に物的文化並に精神文化の兩面に涉る民族生活の全領域における生活事象は、悉く心理的に理解せられ、社會

心理事象として一元的に把握せられる。そしてその社會心理的生活事象は、一體的な民族心 (Volkseele) 又は國民の心生活 (Seelenleben der Nation) の具象的部分現象として理解せられ、ある一時代における生活諸事象は、その屬する領域は異つてゐても、ある一定の共通の心理的特徴を具有すると考へられて、對象の一體性が確立せられる。しかも民族心の一體性はそれ自體に可視的なものではなく、觀る者の協同體における內的體驗に基いていはば確かめうるものであるとして、主客の二元性が止揚せられる。ここにおいてか視角統一の問題は先づ空間的に觀て、一種の唯心的一元論の構想の下に一應の解答が與へられたことになる。その際、この唯心的一元論は、物的文化事象もいはゆる精神文化事象もともに心理的力學現象として把握せられることによつて成り立つ性格のものであることを、注意せねばなるまい。第二に民族心は内面的自己發展のものとして理解せられる。そして一時代毎にあらゆる生活領域を盡してある一定の共通の心理的特徴が存在するし、又心理的特徴の時代的推移もあらゆる生活領域を通じて一律であるといふ觀察とともに、民族心の自己生成的な發展段階としての『文化諸時代』の理念が成り立つ。その際、今日では周知の、象徴主義、類型主義、慣例主義、個別主義、及び主體主義の五文化時代は、民族心の内面的自己發展が段階的に理解せられたものに他ならぬのであり、視角統一の問題に關聯して重要なのは、かかる五段階そのものではなく、それらを一貫したところの民族心の自己發展、その『發展潛勢力的直線性』の理念こそ肝要なのである、と私考する。かやうにして時間的にも視角の統一は、一應成就せられたこととなる。前著『中世における獨逸經濟生活』に對比して、何たる視角の單純化であり、單一化であらうか。

しかしながら、それは單なる視角の單一化に止まるであらうか。『十一世紀における佛蘭西經濟生活』の視角は、

『中世における獨逸經濟生活』にいたつて、相似形的收斂を生じた。しかし今や『獨逸史』においては、更に一層の相似形的收斂たる意味の單一化が行はれたに過ぎぬのではない。一切の生活事象を心理事象として一元的に理解せんとすることは、單に視角の單一化たるに止まらず、外的なる生活事象を内面化し、且つ主觀化せんとする立場であると言へよう。蓋し、觀られる對象は、その一切の空間的連係と時間的連續とを擧げて、心理化せられると同時に、觀者の内心生活によつて、而してこれによつてのみ、内側から直接に理解せられうるし、又かく理解せられうる限りにおいて對象性をも取得しうるだらうからである。そしてかかる統一視角と方法との下においては、ドイツ史の全體は、ラムプレヒトその人の内心生活の外的顯現に他ならぬといふ意味をさへ取得することにもなるであらう。

然らば、かくの如き統一視角は、『獨逸史』の全篇を現實に貫ぬいてゐるであらうか。事實においてドイツ民族生活の全領域の全發展は、かやうに内面化せられた統一視角の下においてのみ觀察せられてゐるであらうか。一切の生活事象は直に心理化せられ、内面化せられてゐるであらうか。就中、經濟生活の史的發展も亦、かかる統一視角から理解せられてゐるであらうか。これが次に尋ねらるべき問題であり、先に視角の統一が、應成り立つたと記した所以でもある。

四

方法の自覺と方法の實踐とは自ら別箇の事項である。遅くも一八九一年以來一切の生活事象をば心理的一元的に把

握せんとする立場に意識的に立つに至つたラムプレヒトも、『獨逸史』記述の實際に方つては、民族生活の全領域にわたる全發展を心理的一元的に把握することは、もとより必ずしも容易ではなかつた。就中、經濟生活の心理的把握は困難であつて、主著第一卷以降においても、經濟生活を敘するに方つては、經濟制度の外部的觀察に終始してゐると觀られる。そしてこのことから生ずる視角の分裂、方法の破綻を、何人よりも強く意識し、その點に鋭い批判を投じたものは、實はラムプレヒト自らであつたのである。即ち主著第一卷第三版（一九〇二年刊）の序文（一九〇一年、九月、十一月において、第四版（序文、一九〇六年）の行はれてゐる今日ではひとの殆んど注意しないであらうところの、しかもラムプレヒトの方法を考へるためには極めて重要な、峻嚴なる自己批判を見出す。即ち、この第三版において前諸版に比して何等本質的變更と改善とが行はれて居らない事情を敘して後、彼は次の如くに言ふ、

『しかも、いかなる方法で最古ドイツ史の記述のための變更せられ且つ改善せられた諸基礎が獲られうるかが、二方面に涉つてここに少くとも示唆せられて然るべきであらう。第一に問題になるのは經濟史である。この領域においては著者にとつて、その獨逸史の最大なる、しかも従來何人によつてもまだ認識せられたことのない、少くとも公けには言及せられたことのない、缺陷と思はれるのは、獨逸史の最初の構想に方つては、經濟の（同時に又往々にして社會の）發展をば、純粹に心的に表現することがまだ出来て居らないといふことである。經濟史研究は周知の通り多くの點で法律・並に法制史研究との相似的形成を志して發達し來つた。……經濟史も亦最初は經濟の外的相貌の歴史であつたし、根本的には今日でも尙ほその通りである。

……蓋し、これら一切の學説を特徴づけてゐるものは、根本的にはやはり、經濟思考の外的服飾からの、經濟衝動の結果からの、出發といふことだからである。しかし今日では——そして余はこの考へをばもう五ヶ年このかた友人仲間や公けに講義では述べてゐるのである——さやうな見解はもはや不充分である、即ちそれは内面化せられなければならぬ。諸經濟制度の展開

が、經濟史の本來の、中心の對象を形作るのではなく、むしろ經濟意識の發展がそれを形作るのである』（序文、一三一—一四頁）。『經濟史の發展を、心的諸衝動並に諸特質の發展として把握するといふ意味での、經濟史の心理化が缺如してゐる。余はこの缺陷をば、上述のやうに、一八九五年頃認識した、そしてすでにその當時、心的經濟段階の必要を力説したのである……』（序文、一五頁）。

かやうにして、漸く一八九五年に至つて、『獨逸史』における『物心平行論』的不統一が自覺せられたのであり、すでに遅くも一八九一年以來——又、彼自身の言ふが如くんば、この序文のときから二十年以前から——ドイツ史を心理的一元的に把握せんとする立場に意識的に立つたといふのは、實は精神の氣構への中に過ぎぬのであつて、實際に採られた方法を觀察すれば、依然として『中世における獨逸經濟生活』の二元的觀照方法が、事實上は『獨逸史』においても、少くとも當初は、採られてゐたのである。その缺陷が一八九五年頃自覺せられ、一九〇二年に至つて先の序文に公表せられたわけである。しかも二元的立場の『缺陷』を自覺し、それを公表するは、一元化志向の大きなを示すものであり、事實ラムプレヒトはこの頃から經濟史の心理化に努力を傾けるにいたる、同時にそれは經濟史研究が彼にとつて新しい意義を取得し來つたことを意味するのである。

かやうの新しい意味と方法との下における經濟史研究の結果は、すでに、一九〇三年二月の序文を有つ『獨逸史、補卷』第二卷第一冊といふ形で現れてゐる。『最新の獨逸の過去』を取扱つたこの補卷においてラムプレヒトは古代以降の經濟生活の發展をも概觀し、經濟諸段階の心理化に努めてゐる（五版、一一—一四頁）。今や、經濟生活の發展諸段階は、二三七—八頁の一覽表に示されてゐる通り、『經濟欲望と充足との間の心的緊張』の擴大を區分原理とするも

のであるが、それは經濟思惟及び經濟豫考の増殖、經濟衝動及び經濟知性の増大を契機とするところの區分でもあり、心的緊張『克服』の範域をも考慮に入れて、第一に心的緊張の皆無なる又は僅少なる原始状態が、第二に封鎖的經濟範域の内部における緊張の時代が、第三に自由なる經濟範域の内部における緊張の時代が區分せられ、第二の時代は更に三ケの時代に、第三の時代は更に二ケの時代に細分せられる。しかしながらかやうの經濟發展の段階は、いかに一應は心理的に把握せられてはゐるもの、未だ民族心の内面的發展段階としての、象徴主義、類型主義、慣例主義、個別主義、及び主體主義の五文化時代にその儘應する構想のものではない。心理的一元的觀照方法の内部で、尙ほも二通りの視角が執拗に對立してゐるとも觀られる。説いてこの點にまで至ると、本稿では今まで觸れずに置いたラムプレヒトの青年時代から元々存する二面的關心に言及せざるを得なくなる。彼は青年時代から經濟史研究と併行にいはゆる精神文化史研究に多大の關心を有してゐたのであり、『十一世紀における佛蘭西經濟』を著した一八七八年は、同時に『獨逸中世における個性と個性に關する理解とに就いて』(Ueber Individualität und Verständnis für dieselbe im deutschen Mittelalter = Anhang z. DG., XII, 1909, S. 1—58.)の成稿の年であり、その後の數ケ年、經濟史研究のための史料蒐集に多忙なるときに方つて、あたかもこの採訪に基いて『八世紀より十三世紀にいたる頭文字文様』(Initial-Ornamentik des 8. bis 13. Jahrhunderts, 1882)の美術史研究が上梓せられてゐることに注意を拂はざるを得ない。單純に經濟史研究の一途から入つて漸次研究對象を擴げて行つただけではなく、研究生活の當初から存してゐた二面的關心が、一九〇三年心的一元化の熾烈なる要望の下に經濟發展を見直してゐるときに方つても、尙ほも微かに存續してゐるやうに觀られるのである。——而もこの微かなる對立をも、ラムプレヒトは漸次克服して、

晩年の『歴史的思考入門』（一九二二年）にいたると、『欲望知覚の中と、知覚せられた欲望を充足せしめようとの衝動又は意志の中とに與へられてゐる經濟生活の固有心』（入門、一〇五頁）の發展としての經濟史的展開は、主として藝術史の側で最初發見せられた五文化時代の中に、ともかくも有機的に吸収せられて（入門、一〇三―一〇六頁）、爰に心理的一元的理解が完成を告げる。同時にかく心理化せられた經濟發展段階は、文化時代一般と同様に、世界的妥當性を有つものの如くに主張せられる。

五

かやうにしてラムプレヒトはその研究生活の實に全期に涉つて、經濟史研究に努力してゐる。一八九一年、『獨逸史』の刊行の開始とともに、彼は經濟史研究を廢したのではない、ただその方法と意味とに變化が生じたに過ぎないのである。一方では絶えず視野の擴大が行はれ、他方では常に視角の統一化に努められてゐるところから、經濟史研究の題目はもとより、その方法も、その意味も不斷の變化を免れないのである。ひとはそのことをばラムプレヒトの精神の成長と呼びうるであらう。そして、もし一八八五・六年の大著が今日においても學界の共同財産として考へられて居り、それを批評し補修することが現時の學界で適しいこととなされてゐるとすれば、一八九一年以降の、就中一九〇三年以降の『獨逸史』における經濟史研究も亦、當に學界の共有のものたるべきであらうし、この精神の高みにおける經濟史研究を批判し補正することも亦、現時の研究者にとつて適しい仕事たるべきではなからうか。

然るに本邦の事情は別としても、西歐學界においても、ラムプレヒトの經濟史研究は、一八八五・六年の『中世に

おける獨逸經濟生活』のみを中心として、問題にせられてゐるに過ぎぬやうである。たとへば一九三五年ペルランがラムプレヒトを評したのは、後者の八九三年ブリュム修道院賃子帳の成立に關する史料批判的考證を中心とするのであり (Ch.-Edmond Perrin: Recherches sur la seigneurie rurale en Lorraine, 1935, 特に p. 25 seq.)。一九三七年リュトゲが『初期中世農制』の研究を中獨諸史料の上に行つたのは、それとは明記せられてゐないけれども、ラムプレヒトの一八八五・六年の研究が西方史料に基いてゐることの一面性を補修せんとする意味をもつであらうし (Fr. Lüfge: Die Agrar Verfassung des frühen Mittelalters im mitteldeutschen Raum vornehmlich in der Karolingerzeit, 1937.)。一九三九年ドーブシュの『ヘルシャフトと農民』とに於ては、東南獨逸諸史料を中心として、ラムプレヒトの『中世における獨逸經濟生活』を批判することが、主要課題の一となつてゐる (A. Dopsh: Herrschaft und Bauer in der deutschen Kaiserzeit, 1939.)。

かくの如く、『中世における經濟生活』は現在においても尙ほ獨・佛學界に生き續けてゐるのであるが、『獨逸史』における經濟史研究は、いはば忘却せられてゐる貌である。もとよりラムプレヒトは『獨逸史』執筆の心境をその第一卷第二版(一八九四年)の序文に靜かに述べて言ふ、『初めの數卷が世に出るから余は尋ねられたものである、この書は本來どういふ範圍の人々のために書かれたのであるか、と。余はそれに對して、余が起草の始めに方つては總じて何等特定の讀者層を眼中に置いてゐたわけではなく、むしろ特に余自身を眼中に置いてゐたのだ、と確言することができた。ドイツ史の一般的敘述のうちにドイツ民族の過去に關する余の觀照を清澄ならしめること、余に迫り來るところの、同時に歴史的世界觀一般の諸問題たるものを掘り下げることに、これが余の意圖であつた……』。この已れ

のためにする學問なればこそ、それは學界の共同財たるに適しい研究ではなからうか。もとより『獨逸史』に多くの缺陷があることは、論争期に諸家が指摘してゐるところであり、特にはそのでの經濟史研究には批判の餘地が多からう。就中、心理的經濟發展段階の世界的妥當性の考方は、今日では文化圏の觀念や、民族性の理念によつて補正せられねばならぬであらう。蓋し、經濟意識の超民族的性格を想ふことに對しては、多くの疑問が提出せられうるからである。しかしながら、經濟は、結局『物』の問題ではないといふ考方、それは、欲望がいかに知覺せられるか、知覺せられた欲望充足のためにいかなる意志設定がなされるか、意志實現のためにいかなる知性が働くか、といふ『心』の問題であるといふ觀照は、無限に示唆的ではなからうか。そしてラムプレヒトに従つて、經濟史とは窮極において經濟精神史であり、經濟意識史であるといふことが承認せられた後では、經濟意識の時代的發展を問ふのみならず、ラムプレヒトを超えて、その民族的・文化圏的特性を尋ねるといふことが、經濟史研究の一の中心課題となるべきではなからうか。

—昭和十六年七月七日—